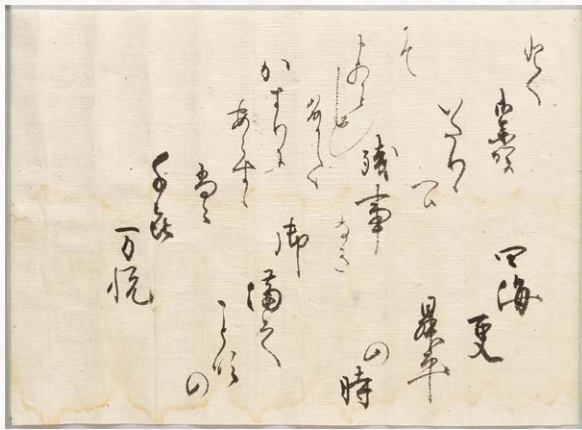
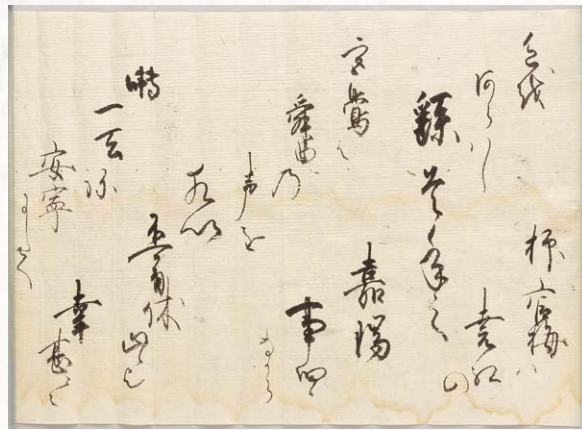


香川家文書と桂宮家旧蔵御宸翰



後水尾天皇御宸翰 書状 (2枚共に) 縦38.3cm 横53.0cm



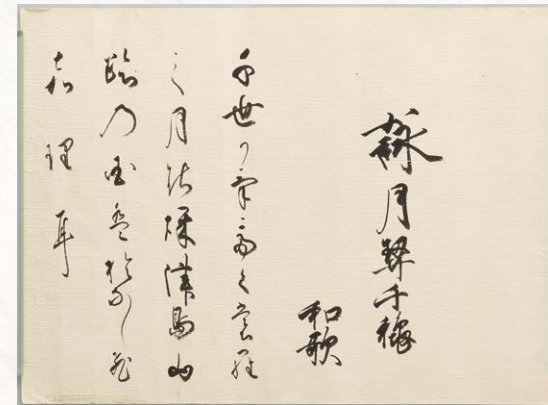
香川家文書

伯爵香川敬三関連の総計24837点にのぼる香川家文書は、平成30年(2018)に学習院大学文学部史学科に寄贈(一部寄託)された。当時当館客員研究員であった皇學館大学上野秀治教授により、昭和57年(1982)から皇學館大学にて整理が行われ、仮目録が作成されている。皇學館大学史料編纂所では、この成果を元に「香川敬三関係史料の世界」と題した史料展示が数度にわたり行われているが、桂宮家旧蔵御宸翰部分については、今回初公開となる。

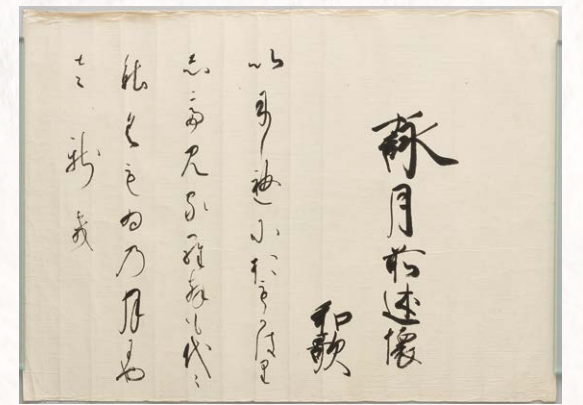
香川家文書の多くは書簡で、香川敬三が長く皇后宮職を務めたことから敬三から皇后への伺いについての言上書、宮内省関係書類、辞令、日記、香川家家政関係書類、書画、写真など多岐にわたっている。敬三関係文書と共に須磨子夫人に関する書簡類、陸軍大佐として軍務に当たった継嗣櫻男、呉竹の内侍として宮中に仕えた長女志保子の関係史料も含まれる。英国留学経験のある志保子は、皇后の通訳や服飾に関わる御用を勤め、明治時代における皇后の西洋化に寄与したと考えられる。

桂宮家旧蔵御宸翰

香川家文書の中には、世襲親王家として江戸時代存在した四親王家の内、桂宮家(八条宮・常磐井宮・京極宮)の旧蔵になる史料群が含まれる。桂宮家は、正親町天皇の第一皇子誠仁親王(陽光院太上天皇)の第六王子智仁親王を祖とする。智仁親王は、学問文学への造詣が深く、後進の育成にも努力し、江戸時代の宮廷文化を育む豊かな土壌を整えた。また、古典籍の収集・書写などの活動にも力を注いでおり、その足跡は旧桂宮本として宮内庁書陵部に収蔵されている。特に、天皇の行幸を迎える場としての後の桂離宮の造営は、初代智仁親王、2代智忠親王による大事業であり、江戸時代前期における宮廷文化と同宮家の高邁な文化意識を伝えている。桂宮家は男系継承に恵まれず、3



靈元天皇御宸翰 和歌懷紙 縦46.1cm 横62.0cm



靈元天皇御宸翰 和歌懷紙 縦47.2cm 横64.4cm



靈元天皇御宸筆(左より) 蘆に鶴、富士に日の出、鶴

代穩仁親王は後水尾天皇の皇子、4代長仁親王・5代尚仁親王は後西天皇の皇子、4歳で夭折した作宮・6代文仁親王は靈元天皇皇子、9代盛仁親王は光格天皇皇子、10代節仁親王と11代淑子内親王は仁孝天皇の皇子女である。桂宮家旧蔵史料群には和歌や書状、絵画など多数の宸翰が含まれるが、これは度々皇統から継嗣を迎えるなど、天皇と血統的に近い当主を擁した同宮家旧蔵史料の一つの特徴であろう。後水尾天皇から智仁親王に贈られた年賀の文などは、表具を施されることなく授受され、当時の様式を原状のまま伝えており、古文書学の様式論的に見ても興味深い。また今回新たに見出された広沢切など、桂宮家創立以前の中世段階における典籍の断簡や古文書類も含まれており、宮内庁書陵部に収蔵されている旧桂宮本資料との関係性も念頭に整理・検討が必要である。

最後の当主淑子内親王が明治14年(1881)10月3日に薨去し、桂宮家は絶家とされたが、その際同家の整理に関与した敬三がこの史料群を譲り受け、香川家に伝えられたと考えられている。桂宮家当主と天皇との間における親しい交流を鮮やかに伝える、貴重な文書群である。

※2・3頁掲載資料は香川家より学習院大学文学部史学科寄託

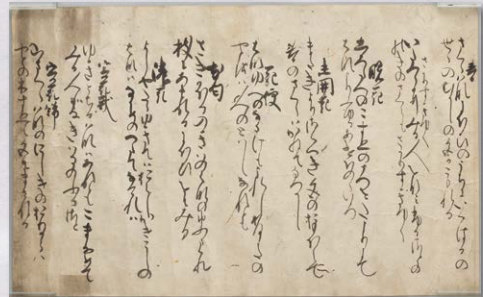
(EF共同研究員 田中潤)

伏見天皇御集断簡(広沢切)

香川家文書の内、桂宮家旧蔵史料の中から確認された伏見天皇自筆になる自家集の一部、一紙(31.4×50.4)和歌九首である。伏見天皇は書への造詣が大変に深く、名筆の藤原行成筆国宝「白氏詩卷」の紙の継目に花押を加えるなど古典を愛玩した。また、自ら小野道風の「屏風土代」を臨模するなど、名筆の数々を現代に伝えている。広沢切は、この伏見天皇自家集の自筆草稿と伝えられる古筆切である。『増補新撰古筆名葉集』後伏見院の項に「広沢切、杉原紙、巻物、父王の御哥、二行書」との記載があるが、この断簡も裏面には伝承筆者を伏見天皇皇子「後伏見院」とする墨書がある。反故紙を翻して用いた料紙らしく、薄く墨痕が確認されるが、反故の紙面は剥ぎとられ、新たに裏打ちが施されているため現状での判読は困難である。

広沢切の通例のように歌題に続けて上の句下の句を一行づつ二行に分けて記している。歌題は「春・さかりすきゆく・曙花・未開花・花便・花句・隣花・寄花歌・寄花錦」の九題で、同題の御製は存在するが、九首いずれもが『伏見院御集集成』に収録されていない、新出資料である。

(EF共同研究員 田中潤)



香川敬三

香川敬三は、天保10年(1839)11月15日に常陸国茨城郡下伊勢畑村(現茨城県常陸大宮市)の蓮田家に生を受け了介と称した。その後、隣村の神職の鯉沼家に養子入りして伊織と称し、少年期には藤田東湖に学んで尊王攘夷を志してその活動の中で謹慎処分を受けたこともあった。幕末には水戸藩士として上京し、その活動の中で岩倉具視の知遇を得ている。名前も変名の小林彦次郎を称し、後に香川敬三と称するようになった。戊辰戦争では岩倉具視の子具定の下東山道総督府に配属された。維新後は兵部省から宮内省へと転じ、岩倉遣欧使節団に随従した後は、皇后の側近として仕えた。明治以降の敬三の業績について皇學館大学史料編纂所編『図録・香川敬三関係史料の世界』の総合解説は、「近代的な皇室を築き上げるために、法制面のみならず実務面でも大きな役割を果たした。殊に、前近代においては前面に出ることが殆どなかった皇后の地位や役割を、天皇と同等に引き上げることに尽力したのである。敬三は歴史の表舞台に立つことは殆どなかったが、明治の宮廷を考える上では欠くべからざる人物の一人である。」と評している。こうした事績により、伯爵を授けられ、長く側近にあった昭憲皇太后の崩御の後、その後を慕うかのように大正4年(1915)3月18日逝去した。

(EF共同研究員 田中潤)